

たとえば、新聞広告のすべてを求人広告にする
柔軟なアイデアが実現するとき、時代は変わる



真つすく前を見据え、背筋を伸ばし、拳手をして、いる女の子たち。瞳を輝かせ、勉学に励む姿の写真に添えられたキャッチコピー。「女の子の登校率が上がると、子どもの死亡率が下がる。」なぜか、その疑問をホテ「読み書きができれば、たとえ言葉の説明書きが読めるようになる。肉身から身を守る方法を、自分で学べるようになる。」と強く、読み書きができる女の子が母親になったとき、自分以外の家族も子どもも守れる可能性が高まるという事実がある。

来を守る力になるか、という疑問をホテタイプに伝えたいと思った。ひとりの女の子が学校で勉強できるようになることで、家族や社会、さらには国の状況まで変わる可能性がある。今までの「かわいそうな状況にある子どもを助けたい」という動機とは違う、前向きな気持ちで募金に協力しようと思えるような広告にしようと考えた。アートディレクターとも「意志を感じるビジュアルがいい」と、女の子がイキイキと学ぶ写真を選んだ。

反響も大きかった。女子教育の大切さを理解できたという内容のほか、お金の使われ方が明確なので自分の募金がどれだけの力になっているかわかったと感動の声もあった。それ以来、広告には「いのちをまもる具体策」という図式を掲載し、テーマと金額に応じて募金の使われ方を明確に記している。お金の使われ方を可視化することで、継続的な募金協力を求めている。

「シ」を伝えるように通じている媒体。たとえば、就職氷河期の今なら、広告面すべてを求人広告にしてしまおうか。求人している企業が実はたくさんあることが示せるし、就職難を嘆く世論に対してもメッセージを発信できやと思っ「たしかに、今なら」というキーワードは重要だ。「ツイッターやSNSはテレビや新聞と運動させて、今、を伝えていく方法が有効」とも語る。「タイガーマスクが寄付する」というニュースもテレビや新聞で取り上げるから、SNSなど一気には広まり、同じ人が出てきたんだと思ふ。ネットのニュースだけでは、そこまで話題にならなかったと思います。いずれにしても、ライブなものが受けていると分析し、それを広告でも活用すればまだまだ効果は期待できるはずと小郷さん、終始一貫で控えめ、けれども発言にはぶれがなく、芯がある。鋭い感性と情報収集能力、既存メディアと新しいメディアを融合させる知恵は、もっと考えればあふれるほど出てくるだろう。次世代の広告業界を牽引する若手の秘めた力。時代が動き出す。今、はさきと、間もなく、やってくる。

電通のコピーライター！小郷拓良さんは、ユニセフの募金広告を入社3年目から継続して手がけている。その多くは、開発途上国の過酷な現状を伝え、募金の必要性を訴える。写真も悲しげな顔で見つめる子どもたちが中心だ。けれども、冒頭で紹介した女子教育をテーマとした広告は、それまでのケースとは一線を画す。写真の女の子たちの瞳は輝き、未来を見つめる。希望すら感じられる。小郷さんも、エポックメイキングとなった広告だったと振り返る。

「女子教育の大切さをテーマに広告を作ってほしい」と細問を受けたとき、募金がいかに子どもたちの未来を守る力になるか、という疑問をホテタイプに伝えたいと思った。ひとりの女の子が学校で勉強できるようになることで、家族や社会、さらには国の状況まで変わる可能性がある。今までの「かわいそうな状況にある子どもを助けたい」という動機とは違う、前向きな気持ちで募金に協力しようと思えるような広告にしようと考えた。アートディレクターとも「意志を感じるビジュアルがいい」と、女の子がイキイキと学ぶ写真を選んだ。

「今が求められる時代に、新聞広告ができる」と。スマートフォンが普及した直後には、募金広告を新聞に出稿した。緊急募金と称し、それまでのユニセフの広告とは構造を変えてダイレクトに募金への

「新聞は世論を作り出す媒体であることを再確認しました」と小郷さん。広告業界を志したきっかけは「商品のいいところを発見して、褒める。広告の表現は、つねにポジティブ。モノを売ることを通じて、世の中を明るくできる」というところをひかれたから。商品やサービスの持つポテンシャルを見だし、企業のポジティブな姿勢を伝える使命が、広告の根底にはある。「自分がかわった商品が世の中で話題になり売れると、親のような気分がうれしくなります」。今年で入社7年目。メディアが激変する最中に社会人になった世代。そんな若手クリエイターは新聞広告をはじめとする既存のメディアをどのようにとらえているのだろうか。そんな質問に対し、小郷さんはユニークなアイデアを切り出した。「新聞は社会的なメッセ



2010年6月22日付朝刊掲載



2010年12月14日付朝刊掲載



ユニセフ募金にご協力下さい

2009年6月22日付朝刊掲載



小郷拓良さん
こ郷・たける/1980年生まれ。2005年度海峽大学大学院卒業後、同年電通に入社。コピーライターとなる。日本ユニセフ協会の広告には入社3年目から携わり、今では1番の古株。主な受賞歴は、TCC賞金賞、OCC新人賞、朝日広告賞、東京インテラティブ・アド・アワード、消費者のための広告コンクール、モバイル広告大賞、タイムズアジア・パシフィック広告賞入賞など多数。